様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月　 ４ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５００

研究課題名（和文）清末民国初期華英言語接触所産の華語の特徴についての実証的研究

研究課題名（英文）A study of the features on Chinese language that Chinese and English contact had between 19th and 20th century.

研究代表者
矢放　昭文（YAHANASHI, Akifumi）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：２０１４０９７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は1840-41年の阿片戦争前後から民国初期（1919年の五四白話運動）までを考察対象の期間として、英語学習の過程で身につけた英語音・英文法の知識が中国人の書面言語にもたらした言語特徴ついて実証的に研究することを目的としている。語音面については『華英通語・狩野本』（1855年）など広東語による英語教科書類に見える英粵対音標記の変遷情況分析により知ることが出来る。文法については民国初期（1918-1922）にニューヨークの二大学とケンブリッジ大学に留学し高度な英語能力を身につけた徐志摩（1897-1931）の翻訳作品文の“被”構文（受身表現）などに「歐化特徴」を顕著に見出すことが出来る。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to demonstrate the linguistic features found out from the Chinese Language that Chinese and English contact had yield around from the beginning of First Opium War, 1840-42, to the New Culture Movement of early 20th century period. As a result, we have made 9 articles, including two drafts, and printed “Report” of Grants-in-Aid Scientific Research (GASR) project that we initiated in 2015. Those 5 articles written by organizer are based on the manuscripts of Anglo-Cantonese transcriptions, and described the Cantonese phonological aspects of the second half of 19th centuries.
On the other hands, the share researcher has found out the definite Europeanized features such as a kind of passive voice included in the translated works of Chinese by Zhi-mo, Xu (1897-1931), who had acquired advanced standard English through the times study abroad to Cambridge or other universities of U.S.A. and England, between 1918-1922.

研究分野：中国語学

キーワード：言語接触　英語　華語　広東語　英粵対音　徐志摩　歐化語法　“被”構文

１．研究開始当初の背景

（1）清末民国初期は、社会と文化の構造変革が劇的に進行したという点で中国史上特筆すべき時代であると見なされている。人々の言語生活も例外ではなかった。清末まで続いた科挙制度のもと、文言文を主体とする書面言語にも変革の気運は高まり白話文を主体とするものに移行し始めた。殊に五四期白話運動（1919）に至るまでの、清末から民国初期の書面言語の変遷については、代表者、分担者ともにかねてより関心をよせていた課題であり、本研究以前にも取りくんでいたことを研究開始当初の背景の一つとして挙げることができる。

（2）もう一つの研究背景は、代表者が、南方方言、とくに広東語（粤語）形成について一貫して持続してきた好奇心に源を発している。現代の広東語は中国語方言の中で書面言語を社会的にも文化的にも大きく発達させているという、他の方言と著しく異なる特色を持っている。この特色の資料証拠はおそらく明末まで遡って確認することが可能である。だが主として形成された時期は、19世紀前半のアヘン戦争以降、華語と英語が接触を始めた時期に重なることを突き止めることができる。この分野での関連する資料を収集し通読していたことも本研究開始の背景の一つに挙げることができる。

２．研究の目的

（1）清末（19 世紀後半）から民国初期（20 世紀初頭）に本格化した華語と英語の言語接触情況を反映する諸資料を研究することにより、接触の結果生じた華語の特徴を析出し、その漢語史上の価値を明らかにすることが研究の目的である。

３．研究の方法

（1）19 世紀後半から 20 世紀初頭の間に本格化した華語と英語の言語接触情況を反映する諸資料は大きく二つに分けることができる。一つは華人が英国など西洋諸国と通商交易上の必要から編纂した英華字書、辞書、会話書類資料に認めることのできる対音資料である。これらの対音資料が反映する華語はほとんどが当時の広東語音に基づき記録されており、広東語音を歴史的に研究する資料となる。代表者は「英粤対音資料」と呼んでいる。方法の一つとしてこれら「英粤対音資料」の広東語音を中国語音韻學と方言学の両側面より分析し、その語音特徴を通時的に解釈することである。

（2）もう一つは英文学作品を口語体の中国語に翻訳した資料に見える「歐化現象」研究である。本研究ではその主要な資料として徐志摩（1897-1931）翻訳文を取り上げ研究対象とした。徐志摩作品の歐化現象については王力（1900-1986）がはやくに指摘していたが、王力の指摘は、徐志摩作品の文体特色を果たして、総合的に、的確に把握したものであったか否か、まずこの点を確かめることを研究方法の出発としている。

４．研究成果

（1）「英粤対音資料」の主要資料である『華英通語』「東北大学付属図書館狩野文庫蔵本（1855）」及び「ハーバード大学燕京図書館蔵本（1860）」間の標記継承・改字関係分析により、英語知識の普及とともに「狩野文庫本」の“鼻冠音”標記が「燕京図書館本」で“非鼻冠音”に改められていること、『英語集全』（1862）、『字典集成・第二版』（1875）も“鼻冠音”を反映するが『華英通語』とは用法特徴が異なることを解明した。

（2）これら“鼻冠音”標記の存在は、全体として広東語音に基づくものの、一部は閩語の特徴として解釈できる。この事実は 19 世紀中葉の広東語音史の複雑な様相解明の一助となる。

（3）『華英通語』に先行する『紅毛通用雑話』などの対音資料にも“鼻冠音”の標記を認めることができる。その標記の一部は『華英通語』「東北大学付属図書館狩野文庫蔵本」にも継承された蓋然性が高い。

（4）福澤諭吉（1835-1901）は万延元年（1860）の早春、艦長木村摂津守（1830-1901）の随員として咸臨丸に乗船し、サンフランシスコに渡り、中濱（ジョン）万次郎とともに「ウェブストル字引」を、独自に『華英通語』を購入して持ち帰った。同年秋、片仮名ルビにより『華英通語』収録の英文に発音を、義註に訓読を加筆し『増訂華英通語』として出版した。福澤最初の出版物であった。福澤が持ち帰った原書は木村家に帰属したと一部に伝えられるが、今日その所在は不明である。

「東北大学付属図書館狩野文庫蔵本」と慶応大学が復刻した『増訂華英通語』を比較研究した結果、「狩野文庫本」は福澤が現地で購入した『華英通語』に最も近い板本であることを考証することが出来る。「ハーバード大学燕京図書館蔵本（1860）」を福澤購入本とする研究論文が以前公刊されているが、収録語彙の分類法とその排列、収録語彙の種類、英文例などについて全面的に比較してみると、この説は明らかに誤っていることがわかる。福澤の『増訂華英通語』は「狩野文庫蔵本」と同一か、あるいはこれに極めて近い板本であったことを論証することが出来る。

（5）福澤は『増訂華英通語』において、片仮名ルビを使い英文に音註を加えているが、その標音方式は大槻玄澤『蘭学階梯』（1788）、七代目桂川甫周『和蘭字彙』（1855）などに継承され、江戸時代中期から後期を通じて日本で使われていた蘭学者の著作に由来して

いることが、特に/r/音を一律「ル」に標記していることから判る。福澤は英語の発音標記について蘭学方式を継承し、自身もそれに基づいて音読していたのである。

（6）『華英通語』「東北大学付属図書館狩野文庫蔵本」は英語/r/音を標記する際に特殊な漢字（竹冠に厘：「篧」）を 3 例使用しているが、大英図書館が所蔵する書写資料にも認めることが出来るものであり、当初は民間に流布していた俗字であることが判明する。同字は唐廷樞（1832-1892）『英語集全』（1862）に至り「嚁」字も加えて多量に使用されているが、その後の西洋式印刷術の導入にともない、「厘」「喱」などの字に代用され、次第に淘汰された経緯を知ることができる。この点についての資料として 20 世紀初頭前後刊行の莫文暢『唐字音英語』、卓岐山『華英類語』（光緒三十年重刊）、『華英日用増訂英語全書』（民国廿四年序）などを挙げることが出来る。

（7）英語/r/音を『華英通語』「東北大学付属図書館狩野文庫蔵本」は北京語音「児」を組み入れた「二合音」方式も利用し標記している。一方「ハーバード大学燕京図書館蔵本（1860）」は「狩野文庫本」と同じ板木・板面を使用しているにも拘わらず、収録語彙分類を大きく変えると同時に、標音箇所については「二合音」方式を採用せず、單字または二字併用に改めて/r/音を標記している。また『紅毛通用雑話』及び「狩野文庫本」の対音資料に頻見する“鼻冠音”を“非鼻冠音”に徹底的に改めており、両者の標音基準の相違を読み取ることが出来る。

（8）『英語集全』は英語の強弱アクセントを声調變讀により標記している。“強”アクセントに対しては“上平”に變讀し、“弱”アクセントに対しては“下平”に變讀しており、英語音の強弱アクセントを漢字に基づき表記した例として貴重な価値をもつことが判る。

（9）『英語集全』はさらに英語音/th/[θ,ð]標記に⊿を使うこと、漢字の右上に｀を加えて子音のみの讀音を指示すること、/l/音を示す中古来母字の右上に○を付加することにより/r/音を示すこと、さらに英語音節の連讀標記に直線を使うなど、補助記号を様々に設定し、駆使していることが見いだされる。『英語集全』の漢字使用による英語音標記は詳細であり、字音標記を目的とする漢字用法の極限を知るうえで貴重な情報を伝えていることが判る。

（10）『英語集全』が漢字による英語発音標記に口偏字を多用していることもその特色の一つとなる。いずれも漢字音では英語音を的確に標記出来ないために取られた処置である。なお、口偏字を加えて変調を示す方法は、古くは先秦時代の文献資料、例えば『詩経』や、その後の漢訳仏典にも見られるが、広東語関連では 18 世紀後半成立と推定される『粤謳』に確認できる。19 世中葉の『華英通語』では頻繁に採用されており、『英語集全』編者唐廷樞の独創でないことは明白である。今日の書面広東語に頻出する方言字の一部は『粤謳』、『華英通語』や『英語集全』の口偏字に由来することが判る。

（11）広東語の下位方言には、白宛如（1990）「粤語的某些変韻現象」などの研究により、文法機能の変化に伴う変調現象が報告されているが『華英通語』にもその側証を認めることができる。広東語の繋詞“係”から動詞あるいは前置詞としての“喺”が変調により発達した事例の一証拠となる。

（12）徐志摩の翻訳文における歐化現象研究では、王力（1900-1986）を嚆矢とする従来の研究で指摘されなかった歐化現象の定着例とその変化の過程を詳細に考証した。近年中国で歐化語法を進めた賀陽（2008）などの研究著作上の問題点をも克服し、従来の研究水準を超えたレベルで歐化の様相を確認することが出来ている。特に歐化現象の観測された時期、使用頻度の変化の様相を具体的に示すことでこれまでの理解を塗り替えることが出来ている。また一部の歐化表現においては徐志摩特有の用法も発見できている。

（13）徐志摩の“被”構文は「消極」義が主体であり旧白話と同様の状態が保たれているにも拘わらず、一方で「非消極」義を示す複数例を確認することが出来る。少数であるが故に、逆に歐化の兆しとして貴重な価値を持つと判断できる。

（14）受身マーカーの“叫、让、给”と“被”の選択に文体が関係すること、特に徐志摩の翻訳用例で、「対話」場面では“叫、让、给”の使用例が圧倒的に多く、しかも王力の指摘より約 30 年早いこと、すでに口語において“被”を使用しない傾向が定着していたことを発見している点は、口語発展史を辿るうえでも貴重な研究成果である。

（15）無生物主語の“被”構文の出現頻度は旧白話小説の約 2 倍に達しており、1920 年代の状況を示す事実として橋本万太郎 1987「漢語被動式的歴史・区域発展」での指摘を支える新たな証拠とすることが出来る。

（16）研究成果報告書として 2016 年 3 月に矢放昭文・関光世共著『清末民国初期華英言語接触所産の華語の特徴についての実証的研究』（152 頁、100 部）を印刷・刊行し、関係者に順次配布している。
発行場所：京都産業大学第二研究室棟 529 室、印刷：（株）中西印刷。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 矢放　昭文
英粵對音的聲調變讀與英語重音、中國文化研究、査読有、第 32 巻、2016、109-124

② 関　光世
中国語における欧化研究の変遷と今後の可能性、京都産業大学論集、査読有、第 49 号、2016、201-215

③ 関　光世
徐志摩の翻訳作品に見られる“被”構文と欧化、中国語学研究開篇、査読有、第 34 号、2016、223-231

④ 矢放　昭文
福沢諭吉と『増訂華英通語』、京都産業大学日本文化研究所紀要、査読有、第 20 号、2015、64-86

⑤ 矢放　昭文
粵語広幡小説の「甩」、中國文化研究
査読有、第 31 巻、2015、1-16

⑥ 関　光世
徐志摩の翻訳作品に見られる欧化現象について、京都産業大学論集、査読有、第 48 号、2015、157-175

〔学会発表〕（計 4 件）

① 矢放　昭文
動詞/lat[1]/在粵語歴史上的淵源、第二十届国際粵方言研討會（香港中文大学、中華人民共和国香港特別行政区新界）、2015 年 12 月 12 日（土）。

② 矢放　昭文
粵語広幡小説の“甩”と“啖”、天理大学中国文化研究会 2014 年度第 4 回公開研究会（奈良県天理市杣之内町 1050 天理大学研究棟 2 階）、2014 年 11 月 25 日（火）。

③ 矢放　昭文・関　光世
清末民国初期の英語知識と歐化語法、日本中国語学会 2014 年度関西支部例会、会場：大阪産業大学梅田サテライトキャンパス（大阪駅前第 3 ビル 19 階）、2014 年 6 月 28 日（土）。

④ 矢放　昭文
『英語集全』与『英華分韻撮要』、第 18 届国際粵方言研討會（香港科技大學、中華人民共和国香港特別行政区新界）、2013 年 12 月 8 日（日）。

６．研究組織
（1）研究代表者
矢放　昭文（YAHANASHI,　Akifumi）
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：２０１４０９７３

（2）研究分担者
関　光世（SEKI,　Mitsuyo）
京都産業大学・外国語学部・准教授
研究者番号：５０４１１０１２